

九月六日

更新を野暮用で留守にしてしまい、お詫び致します。

二カ月間の野暮用とやらをブログでの公表も考えたのですが未定です。なにしろ内容がお粗末なものですから。

発売中の「発言者」九月号に『解つてたまるか！理解への反逆』金子光彦氏の論考が載っています。目配りとメリハリの効いた文章、愉しく拝読しました、金子氏へお礼を申し上げます。改めて「解つてたまるか！」の台詞が良いのに感嘆します。この戯曲については何処やらの不届き者により冷水を掛けられ、なにやら消沈の態ですが、金子氏の論考で元気を頂戴しました。

金子氏は、戦後の日本人は社会の恥部を恥部として感じる感覚そのものを喪失させてしまい、それを助長させたものについての考察を述べておられ、原因として、戦後の浅薄な人間観の横行を挙げられています。

今度の解散から衆議院選挙の経過をみても首相の人相から言っても全ては浅薄そのものです。選挙前（最近）の世論調査で自民党がなぜ強いのか、理由が掴めませんでした、急に民度が低くなったのかと不思議でしたが、日経平均株価が四年二カ月ぶりに一万二千七百円の大台に乗ったとの記事を読んで、自民党好調の原因は株価の高騰にあると独り合点

しました。価値基準は金銭の高でしかないの  
でしょう。

日本人の人間観の喪失は永遠に続きそう  
です。

社民党の福島党首の発音はキーボードをロ  
ーマ字入力する様なローマ字発音です。これ  
が今風なのか、未来の日本人の発音形なのか  
おぞましい限りです。

八月三日

今朝、めずらしく小林秀雄の夢をみた。交  
わした言葉は僅かであった。晩年の氏はあま  
り原稿が捗らない様子であったが、私に強烈  
な印象を残し、その存在自体、すなわち小林  
秀雄その人が作品であると感じて、目が覚め  
た。なるほどそういう事かと、独り合点した  
のだが、芸術家はその存在を証明する必要は  
無く、証明せんが為の試みこそが芸術家の不  
在証明であるとの逆説を思い出した。

本物はそれを証明する必要は無く、偽物は  
本物を主張する事自体が偽物としての馬脚を  
露す。芸術家の創作意欲の質が問われている  
のである。「解つてたまるか！」村木の台  
詞で「天才が無いんだよ、自信が無いんだ、  
こいつが無いと何をやつたつて駄目  
さ……。」

次に紹介する「新潮」特集号がおそらく今朝  
の夢の起因であろう。

新潮社からでている小林秀雄生誕百年記念

に吉井画廊の吉井長三氏は小林氏の思い出を、  
幻の「ルオー論」を書いている。

昭和五十一年に小林氏は「ボクは、ルオーを  
書こうと思っているが今、宣長をやっている  
だろう。宣長が終わったら、ルオーを書くよ、

(略) 聖書を読み返さねば・・・」

ルオーの「古びた場末で」と題する二十号  
程の油絵は台所で物思い沈んでいる白衣の男  
が一人静かに座っており、頭上にかすかに光  
らしいものが射しているからこれはキリスト  
です。実に色が深く美しい絵です。これを購  
入した、赤坂の小料理屋の女将の部屋を訪れ  
た小林氏は帰り途、少し興奮しているように  
見えた「おれはルオーを書くよ。書ける。ル  
オーはキリストを描いているんじゃない。ル  
オーは絵の中にキリストの仮の姿を描いてい  
るんだ。それが解ったよ。だから女将があん  
なに惚れたんだ。惚れて神棚の傍に飾ったん  
だ。ルオーを書くには聖書を読まなければな  
らないと思っていたが、そんな必要はなかつ  
たんだ。ルオーは書けそうだ。そうだろう」  
小林先生は大きな声でそう言われました。

以上、引用終わり。

集約され、示唆に富んだ小林氏の言葉に勇  
気を頂戴した気持ちになったのでした。

七月二十八日

この半年ばかりの間に二度、テレビドラマの時代劇と舞台の源氏物語で、ら抜き言葉を聞かされて我が耳を疑いました。テレビドラマも芝居も上演まで、何人も何回も台本を読み、リハーサルや稽古を重ねている筈で、演出者の了解を得ずに役者のアドリブで、ら抜き言葉が発せられたのであろうか。

ら抜き言葉が今生きている言葉であるから時代劇でも生きた言葉遣いを用いるべく遣ったのであろうか。これはシェイクスピア劇の現代語化の是非とも関係するのでしょうか。

NHKの或る女子スポーツアナウンサーは鼻濁音拒否主義者なのか、鼻濁音無しで「が」を大声で強調して、が・が・が・と、がなり立っています。

フランス語は数が勘定できない言葉で国際語として適してしない。石原知事の発言にフランス語教師達が訴えたようですが、朝日新聞が知事批判を展開してくれるのを見越した上での訴えでしょうが、朝日はでっち上げてでも常日頃知事批判を展開しており、先日更迭された浜渦元副知事は見出しでは極悪人扱いである。

石原知事の記者会見での反論、何でも裁判にすればいいってもんではないと思う。には同感ですが、同感できないのは、会見最後に、「私は、言葉ってのは、かつてのままに踏襲されるものじゃなしに、生きているものだからね、それが文化ってことですよね。」

マジヨリテイーに重心を置き、俗受けする見事な政治家の言葉です。しかし、文化人の言葉ではありません。石原氏は総理の座が遠のき失意にあると伺えますが、政治家として全うしていただきたい。

石原氏は福田先生との対談番組で先生の、朝日新聞非カク三原則に賛意を示していたが、「私の国語教室」(文春文庫)を読んでないのでは。

各家庭に一冊、「私の国語教室」常備運動を起こしたいものです。

旧くからの知人松本弘氏が積年の研鑽を経て作品社から「一休往生」を上梓されました。ここにリンクしておきます。(Htmlのページからリンクします)  
一読下されば幸いです。

六月二十六日

家族会・救う会の座り込み最終日ですが新聞、テレビの報道を全て詳しく調べた訳ではないのですが扱いが少ない気がします。マスコミは御家族の永年の御苦勞に報いる事が出来ない心苦しき故に、報道を萎縮ないしは自粛している訳では無いでしょう。

何かに怯えて自粛しているのであれば事態は深刻です。例えば、首相の首席補佐官である飯島氏の顔色を伺っての自粛であってはならないのは当然です。まさか人権擁護法案が成立したとの勘違いではありませんまい。

御家族を座り込みの事態にまで追い込んだ無能内閣を倒せないのは歯がゆいばかりです。いま、郵政民営化法案の是非と拉致問題で解散総選挙の好機ですが、民主党の岡田代表が首相と同じく腑抜け男ですから政局になりません。

座り込みに最後まで参加したのは西村眞悟議員ただ一人であったのは国会議員の実態を象徴しているのでしょうか。今回も情けない話題に終始しました。御容赦願います。

六月三日

「解かつてたまるか！」について福田先生自らお書きになっておられるので紹介する事とします。

戯曲の最も表面的な主題は社会諷刺であり、もう一つの主題「解かつてたまるか！」がその底にあり、それをさらに突き詰めて行くと「明澄なる孤独」にぶつかる。『せりふと動き』玉川大学出版部刊の七十八頁に全集では第七卷二百四十六頁に載っています。引用します。

四季の演出（昭和四十三年・劇団四季初演の演出は今回と同じ浅利慶太氏）に私が不満を感じ、自分自身の手で演出し直して見たいと思つた理由の一つは、浅利氏が村木を村木自身のせりふにある通り田舎から出てきたばかりの無知な人間として扱つた事である。アメリカ大使館をコカコーラの会社と本当に思い違ひしてゐる様な人間が、あれほど人を手

玉に取る様なレトリックを弄べる筈は無く、  
それでは最後に一人残った時のせりふ、つま  
り人気に汚染ひんたされない自然に憧れる気持など  
どうにも理解の仕様が無い。

村木はインテリジェンスを持った芝居気た  
つぷりな意識家である。自分のせりふのどれ  
一つ、無意識に喋つてはゐない。相手にそれ  
がどういふ効果を与へるかはすべて計算済み  
である。私はさういふ風に演出したかつたの  
である。(略)真の主題、あの「明るい死」は  
やはり表現し得なかつた事を意味する。

先月の上演を前に、演出者が「せりふと動  
き」に目を通していけば、違った舞台になつ  
たであろうにと嘆いているのです。

戯曲「解かつてたまるか！」理解というよ  
りも福田恆存を理解する上での肝要な言葉が  
「明澄なる孤独」と「明るい死」であり、そ  
こからニヒリズムを超克した世界が拓けて来  
るのです。

五月二十四日

二十日に「解かつてたまるか！」観劇しま  
した。原作の魅力が上演によって半減してい  
るので失望しました。上演時間四時間のとこ  
ろを二時間半に台詞を割愛したのが失敗の原  
因でしょう。カーテンコールにあれほど時間  
を割くのであれば、カーテンコールを一度だ  
けにして、より原作を取り入れるべきであつ

た。観客の身とすれば休憩時間が二十分と充分に取ってあるのが有り難かったが、一層の事カーテンコールと休憩だけで劇は上演しない方が良かった。何事も中途半端はいけないという教訓を思い出して貰いたい。

電話で村木の声の流れる場面で、村木の声は録音の再生しているようであった。聞いている警察人達が人形のように止まっていたのは聞く演技が出来てないのでしょうか。

観客が笑う筈のところでは笑わない箇所が何度もありました。錯覚や誤解で言葉を間違っ  
て受け取った場合、例えば、原罪と現在が挙げられますが、村木の真剣味がおかしみを産むのですが真剣に犯罪を侵している切実さや切迫感が伺えないから笑えないのです。

台詞と台詞の間に間（ま）を取るべきなのですがそれが無いので笑いをさそわなかったのです。

「昴」の「明暗」の時にも感じた、戯曲を忠実に上演すれば成功間違いないのに何故こ  
うも詰まらない舞台になってしまふのか。

謎は謎のまま残さずに、何とか解明したい  
ものです。これは先生から与えられた課題か  
も知れません。

そもそも私の原作を読んでから観劇するのは、喧嘩を売る為に劇場に足を運ぶ様なもので、健全では無いのかも知れません。演出家、  
福田恆存と浅利慶太を比較する事自体が無謀  
なのでしよう。再演するなら台詞を割愛しな



い事を望みます。今度は是非、劇団「昴」で「解かってたまるか」を観たいものです。

演劇（芝居）をストレートプレイと呼ぶのはみっともない、芝居は全て台詞劇（ストレートプレイ）なのです。新劇と呼ぶのがお嫌なら真の劇「真劇」と呼ぶのが正しいのではないでしょうか。なに、真劇と呼ぶのは私の造語ですがね。

五月一日

あと五日で「解かってたまるか！」でなく「解ってたまるか！」初日を迎えます。福田作品は当たらないと評判になるのは避けたいので劇団四季との連名でダイレクトメールを送らせて戴きました。マスコミ用の公開稽古では反応良く、皆さん大いに笑っていたようで、紙面等で評判を呼ぶ事でしょう。

当會から申し込みの方へのせめてものサービスとしましてS席を購入して下さった方には公演プログラムをチケットと共にお届けすることと致しました。当會宛にチケット申し込みメールを下されば手続きの手筈を取り、後日、担当者から御希望の座席を伺うなど連絡いたします。メールはこちら。公演案内はこちらです。（雑感・PDF版ではリンクが貼れませんのでHTML版を御利用下さい。）

劇団昴から五人が客演で加わり、劇界初めのコラボレーションです。

プログラムの福田・浅利対談から一部抜粋しますが、福田先生のこの劇を書き上げた高

揚感が伝わって参ります。

福田 僕の批評活動は芝居を書くつもりでやっていたのですからね。からかうのも諷刺するのも芝居の原理に従ってやっていたんです。非常に居直って言えば、いままでの批評が劇作家の批評なんだ。(浅利氏の発言を割愛します)そういう意味で社会事業をやったつもりでいますがね。

浅利 これはまた大げさだ(笑い)。こういうふうに素直に観客が楽しめるもので、しかも観客が内的な一つの体験を自分なりに持つという芝居がぼくは創作劇だと思います。(終)

新潮社版「人間不在の防衛論議」のなかに『解かつてたまるか!』を解かつていただく為に。が、収録されています。昭和五十二年に劇団昴が上演した際の機関紙の文章ですが、主人公、村木が終幕で感じる孤独がこの芝居の究極的な主題であり、それが全体から浮上らない様にせねばならないので、四季の初演では四九九回も笑ったのを三分の二に減らさねばならないと書いておられます。

前田嘉則氏が早くも四季の再演を観劇されたようで、観劇記が載っています。前田氏は観劇後に「なんて寂しいのだろう」と感じたのですが、福田先生の主題である孤独を感じたのであれば、舞台として成功であったと言えるのでしよう。しかし、恐らく前田氏の「寂しさ」は福田先生の「孤独」とは別物で

しよう。すなわち前田氏は先生没後十一年経った現在からトータル時間の経過を得て現在の総合的な「寂しさ」を噛みしめられたのでしよう。

上演時間が四時間から二時間半に短縮されたのも原作や初演と異なった劇の印象となるのは当然でしょう。これ以上、あまり憶測で書いては前田氏に失礼に当たりますのでこれで止めます。

「解かつてたまるか！」はこれから何度も上演の機会があるのでしよう。「昂」のとき心底から面白い劇を観た、これこそ本当の劇だと思ったものでした。当時の精神的飢餓状況と現代社会の微温湯に浸かっているような飢餓感の無い状態とを比較するのは困難です。

唐十の芝居に充足しているひとびとは、これを観れば目が覚める事、保証します。

わが国の新劇史は、左翼演劇がイコールで重なります。その中で孤軍奮闘された先生の深い「孤独」感を追体験できるのかも知れません。

「初演の思い出」 日下武史氏の文章から一部引用します。

福田さんの毒舌、悪口雑言の語彙の豊富さ、たんかを切る時のきつぷのよさ、そして諷刺の精神も楽しかったが、誤解も恐れずに言えば、あえてきわものに挑み、そこに徹して観客をよろこばせようとするとしたたかなサービ

ス精神、その中に自分の「芸術」は自ずと顕れる筈だというような信念が感じられて、私は非常に幸福になったのである。以上引用終わり。

日下氏には村木役で出演して欲しかった。福田先生は日下氏が村木役を演じるのを念頭にお書きになったと思えるからであります。

四月二十一日

このところネットで見るのは価格コムばかりで他は見向きもしません。若者の歌は昨今ものは愚劣と言いましょか、ギャーギャーわめいているだけで音楽性の向上姿勢はみられません。ゆえに指向の視線は自ずから古い時代、レコード時代に向かいます。いま、視線なる言葉を遣いましたが、目線なるテレビ用語が跋扈しているのに問題がありますが、話がそれるので目線は後述する事にしましょう。

最近耳にした曲から、菅原洋一の「今日でお別れ」菅原さんは相変わらず物足りないなと苛立ちます。何が足りないのか、それは「語り」が無いのです。この歌手にすれば歌に「語り」の要素など認識外でしょうが想像以上に重要なのです。

歌を「語る」とは詩の音声表現とも言えるのです。音楽性を無視して語りすぎると森繁節になり注意しなければなりません、一般に語りすぎる事はないでしょう。

「語り」の出来ない歌手がほとんどですが、

女性で語れる人を思い浮かべて共通点をさがせば、皆が宝塚の出身なのにおもいあたりました。

三月十九日

どのページであったか一度しか拝見していないので確たるものではありませんし、どの頁であったのかも不明ですが、内容は覚えております。福田先生が、日本は駄目になった、慨嘆されたのについて直接伺った人物もページ制作者も先生の申されている意味が分からないと述べているのを読んで急速にホームページそのものに対して興味を失いました。

福田先生の日本は駄目になった、もう駄目だ。は常々繰り返し話されていきました。テレビの世相を斬るでも話されていて、その認識（日本及び日本人への絶望感）は福田恆存の読者全員に通底しているものと思っております。福田先生の危機感を読者は肌で感じ取っているものだと思います。

高度経済成長下にうつつを抜かして大切なものを失った。失ったものの正体を述べる必要性がいま、あるのだろうか。

やれやれ日本が墮落してしまった現象や原因やらを噛んで含めるように説明しなければならぬとすると暗澹たる気になります。

「解つてたまるか！」を劇団「四季」の自由劇場で五月五日から上演するようです。村木役は初演と同じく日下武史である事を願いますが年齢が問題なのでしょうか。四季はベテランと中堅、新人との演技力格差が大きく、アンサンブルに欠けるのですが、劇団昴等からの客演で穴を埋めるのでしょうか。

「昴」の初演は北村総一郎が村木役でした、今の風貌から当時の面影を伺うべくもありません。

福田先生は四季上演時のマスコミ等への不満を秋山駿氏のインタビューで述べておられるので引用します

僕にとって心外なのは、僕は進歩的文化人批判なんかやっていないのです。一部にそれが出てくるだけです。(略)要するに主題はものわかりのよさという現代の風潮ですね。人間を理解することは簡単にできるといふ風潮に対する僕の風刺であって、人間というのは非常に孤独なものだ、ということを最後に出したかったのです。主人公の孤独というものを作劇術、演出、演技ということを出す、(略)途中に出てくる進歩的文化人批判、これは一つの建物でいえば一つの窓、一つのドアの役割でしかない。(略)(これから)百年経ってしまえば、そういうものは全部消えて、その作品の言わんとする筋だけは残るだろうという事です。

(略)現代のすべてがごまかしがきく世の中

になっている。そして人間の存在が薄弱なものになってきているというところに対する足掻きですね。どうしたらいいのかということが元なので、それを読みとってくれないとちょっとお相手しかねるといふ感じがするのです。『解つてたまるか』に関するかぎり。

引用終わり

二月九日

**ZEK** 番組ゲストとしてソプラノ歌手鮫島有美子さんが出演していました。アナウンサーが鮫島に、きれいな言葉遣いでいらつしやるのは何故ですか。尋ねたら、「テレビを見るが悪くなりますので、テレビは見ません」

この強烈な皮肉を**ZEK**アナウンサーが、充分に理解したとは見えなかったのがテレビ界の現状を現しております。

鮫島さんの新譜を紹介しており岩谷時子作詩・訳詞「ウナセラデイ・東京」「夜明けのうた」「いいじゃないの幸せならば」「旅人よ」「ラストダンスはわたしに」等、カラオケで歌いたくなる曲ばかりでした。最後の曲を流しましたが、聞いて、困りました、発声が人工的過ぎるのです、味わいの無い無味乾燥な歌唱でオペラなら良いでしょうが、日本の歌となると風景が見えて来なければ、人間がいなければ作品としては欠品であります。反対に地声で歌えば良いのかというところでは有りません。

日本の歌はすでに存在しないのではないか、疑問と同時にしかし、残っているのならば、

本物を提示しなければなりません。それは、後述いたします。

一月二十六日

日本の歌の続きです。テレビのコマーシャルソングから聞こえる日本語の発音には耳を疑うものばかりです。生理的嫌悪感を催すのは私ばかりでは無いでしょう。前述しましたが限りなく英語風の発音でローマ字を読んて歌っているのではないか。まやかしともインチキとも言える発音のコマーシャルソングやポップスを否応なしに聞かされるのは精神衛生上はなほだ好ましくありません。福田先生のエッセイ「テレビにはスイッチがある」を見做ってテレビを見ない様になっているのですが、それでも耳に入って来る事があるものです。

民間テレビではコマーシャル時に音量を大きくする設定がしてあります。民間放送連盟では、毎年これを改善すべく本番組との音量差を設けない提案が出されるのですがスポンサー連の反対で毎年、否決されています。音量を下げれば宣伝効果が下がるとのスポンサー側の思い込みなのでしょうが、逆宣伝になる事もあると決断願いたいものです。テレビを見るなら騒音まき散らしコマーシャルの流れないNHKに限りますね。

一月二十二日



昨年末のスマトラ沖大津波ではなんびとも予想し得なかつた大規模の被害を出しました。マスコミは移り気で被害者数や疫病の報道が減少しました。この天変地異を「全体とは何か」を捉える格好の機会ですが、あまりにも現実が残酷ですので、実験室で人体実験を平気で行う神経の持ち主でないと全体を把握し得ないのかも知れません。

朝日新聞虚偽報道事件ですが、朝日の新聞作りのパターンは安保騒動以来変わっておりません。書き得と申しましようか嘘でも何でも景気よく反体制をブツテいれば左翼陣営の中では恒久に評価される。もし、裁判で負けても裁判官の偏向と批判すれば記事になるのです。永遠に「自己批判」しなくても許される風潮を作り上げたのです。今度は騒動が大きくて完全には逃げきれないでしょうが反省や謝罪の文字は何えないでしょう。

安倍晋三氏は朝日新聞に訂正記事の掲載を求めていますがあので会社に訂正記事を求めるのは難しいでしょう。何年前か、つかこうへいが韓国で氏の作品を上演しそれは韓国が日本の演劇を受け入れて、許可する最初の上演で歴史的偉業であると朝日の記事に載りました。しかし、福田先生率いる劇団「昴」が昭和五十四年十月「海は深く青く」を日韓親善演劇交流で上演しております。初日前夜に朴正熙大統領暗殺事件が起こり戒厳令下での公演となったと福田恆存全集の年譜に記載され

ています。「孤独の人、朴正熙」を帰国後すぐに月刊誌、文芸春秋一月号に書かれている旨を朝日新聞に通知しました。早速、朝日で調べたら、劇団「四季」も唐十も公演していると誤報を認めました。私は、訂正記事の掲載を粘り強く求めたのですが、敵は応じませんでした。抗議するのが私一人では、多勢に無勢で致し方有りません。福田先生の名を聞く先方が息を呑んだのがなんとも印象に残っております。

平成十七年一月四日

明けましておめでとうございます。正月三箇日、関東平野は晴天に恵まれ清々しく正月でした。

大気が澄んで、高所から眺望しますとかなたの地平まで見渡せました。ジーゼル車排気ガス規制のおかげなのでしょう、確実に大気汚染環境が改善されました。石原知事は総理となるべく決起の年となるのかも知れません。

北朝鮮に弱みを握られたのか、全く機能しない小泉内閣を崩壊させなければなりません。

「これでいいのか日本の歌。」最初から結論が出ています。良い訳は無いのです。日本人の頭が悪くなりましたが耳も悪くなりました。おまけに腹が黒くなりました。古来、日本人は日常生活のなかにも洗練された美意識を発達させて来ました。それは話し言葉の発音、

発声に於いても同じです。日本人の耳が悪くなつたと書きましたが環境、すなわち周囲の騒音が耳を悪くさせた一因でもありました。

西洋建築は主に、石とレンガで建築されており、比較的広い空間ですが、わが国のそれは木と紙で、狭く区切られ静かです。西洋建築は声と物音がよく響き、木と紙の環境は音を吸収します。この住宅環境の違いからでも有りましょうが日本語の発音は繊細で美しいという特徴を持ちました。

日本人の美質として、静かな狭い住居空間で相手を思いやり、相手の状態を察知する細やかな気遣いの精神が養われ、言葉遣いが研ぎ澄まされて豊かな言語感覚として結実したのです。音声言語としての美意識へと発達したのでした。

大げさに美意識と言わずとも言葉を自在に操る能力に長けていました。落語の発展、普及をみれば理解して頂けるでしょう。

ところが現在の日本で消費されている歌の全ては言語の美意識とも言葉を自在に操るレベルとも隔絶しているのが現状です。美意識どころか植民地根性丸出しで皆が、ラ行音を巻き舌で発音しています。横文字を真似るのがカッコイイと思っっているのでしょうか。英霊は泣いているぞ、と今日のところは述べておきましょう。

十二月十九日

なんとか PDF ファイルが開ける状態にま

で辿り着きました。未だ試運転の心持ちでして、当方の環境では把握しにくい部分もございます。開くまでに時間を要してしまうのでは無いかと危惧します。ファイルを圧縮する対策が有りますので、お気付きの点、御指摘下されば幸いです。

福田先生のご思想を理解する為の助けになると思える書物があるのですが古本屋で入手できませんかどうか。書名は『生き甲斐といふ事』新潮社刊、昭和四十六年初版。有意義と思える書物をホームページで公開して後世に残せる法はないものか。著作権等の問題があるのですが、検討して行きたいと思えます。

インタビュー「反近代について」聞き手は香山健一氏。見本として少し引用します。

福田 「人間棺を蓋ひて事定まる」と言うけれども、実は棺を蓋つても定まっちゃいないのに、二十ぐらいで棺を蓋つて自分を位置づけてしまう奴がいるんですね。あるものを絶対化して、イデオロギーで死んでしまったり、ニヒルになってしまったり・・・。生き方が決まってマナリズムになってしまった奴は死んだ人間なんだ。ロレンスに惚れてもこれで終わってしまったらもうこれでその人は死んじゃったんです。(略)

演劇なしに人生は成り立たない、つまり仮説なしには成り立たない。誰だって必ず演劇しているんです。(略)二人の(人間)関係に

真実があるのであって、この真実を生かすために一つのお面をかぶるわけです。真実というのは、一つの関係のなかにあるんです。個々の実態よりはその関係の方が先に存在しているのですからね。人生というのは関係が真実なんで、一生涯自分のおかれた関係のなかでもって動いている、それを私は演戯だというんです。生まれながらに、ある何かを固定的に考えてしまい、いつもそれはかわらないと思っている人もいるけれども、そうじゃないのです。

以上、一部引用してみました。どうもつまみ食いのようにうまくないです。やはり全編掲載に限る様です。

後記で福田先生は語ってゐる対象が社会問題であれ、文学の事であれ、両者を通じて結局は一つ事しか述べてゐない。それが解つて頂ける為に、気軽な浴衣掛けのインタヴューを二つ収録した。とあります。もう一つのそれは秋山駿氏相手の『文学を語る』です。講談社刊「対談・私の文学」インタヴュー―秋山駿にも掲載されていますので古本でも図書館でも手にとり易い本です。

